春色淫雨曙三体

へ13
3833
2

門へ13
號3833
巻 1 2

淀の曙三編叙

文人某余が著述の傳ふ在て深しとされ
世ちよりの世の行はれて中ごろ或ハ人情
中ごろ曙人ら於曙何人の号の中にあるべけれども
ふ意何の行潤ぞや元和漢古今の書籍
經傳の学ちよりみな人情に基けり人

情を棄て何ぞ今紙ふ總名をつけし世
双紙まさば可なん余仮名にて浮ぶ紙
編をなして浮世双紙うきよざうしといも
せも殺ぐ馬鹿光能おそれ世間よ深くこの西
べ事と思ふ人あの衣食住生涯の等ち行
ア人ど無業人い貴人の務あるて教光の家
人を扶ちをなしその著公節手ぞや身行人を

要ふ人ども活命行高ふ分を殺ぶ行
時も油断なる時を寵の燈ると消めべ変を
ふて二六時中家業を忘ふあわらびされれ
人間ふ行ふ限ふわるぞ禽獣異ふ
然ふ人ふ彼等ふ羽毛鱗甲を天地間
ふ授ふて衣ふ食ふ食物ふ
ける屋ふ報い庭ふ報出てこを常光

つぶてのごとく降りそそれど紙衾に飽
きず加之大小相扶しつゝ公の休む
云はるゝ間てきの世を生を得るこの苦の
海をまぬかれて夢世ふいひきりに勞
濁るこゝろよりなる行ばこゝろ編て的ハ
感通もあるこゝろ教授の招くこゝろ紙
覺り離会聚教その浮沈をうけもれ

仁をつゝく徹夜して長き夜の明
をまつ今より總名をうまぬ学ぶ呼
塚ほんとも拙家に

夏雲為峯峰 樹蟬收葉夕

牡着風雲ふ矢びして徒

○柳川岸の歌妓於光
○柳川岸の歌妓於花

万葉七
浦前の通客
江戸屋初五郎
噺家
馬樂

春色淀迺曙第三編 巻之上

東都 松亭金水編次

第一回

古人いとく陰德。耳の中の時ずどし。我のを見て感ず
とうや。元と人の為ふ善とせ。そもを他人ふ風徳して。その
善と術ふ。ふとく若ふ。若ふして。若ふ。美下 初ふ弟、
愛女のさま。いとく不仮ふ品ひけれど。可楽として。若女
体ふ。その人とらもせけるあど。愛女も人八解しるして。その

色こ今成まゝ信さう。おいでなさて上を向き「様ふる
ぐさうどざいまして。何卒光る邦うう見物さる人へ御を
邦ひゃまもと常の間へおり輝こさて。こ法の壇を
を。拾ひ集め光微色こ。早くにして付んまもう内「ヨく
愛女さん宅いの処ど。モウこの子を取り女へハイ私いものの
光の乃傍町ふ居まもるもの。きどほの町いどざいまん「
へ。方根うこもやの脇輩ど。きこ万一光新のやうふ法
ものふ出屋こ又後人。後今成ふ。拾方が邦人と
高こ知ど浦やう後人。彼ものこ拾へて。ものこ拾へて。ものこ
ど。実ふ形夜ど立ちや。一人歩ハ中ど見人ど。毛見物人危
侍町ふ。こ知の横丁こ右人曲つて。付ふりでどぜへま
まど。修手町ふりの見り。迎ものの法使寿ふこの壇の
町内まで。送つて来うぢや。どぜへませんう初「ふるるどぜ支ど
見ふう。モウ彼毛手別近。こ見ふこらハ深ハ右方
根サどこで浦おふんどの。大通りう送ひまもて。支あう愛
女さん送りてあるうう。さうこと。女人送りてあるきナ女「きた方根こ

ごぜいまさうな。孫ふ[illegible]の毒さうなごぜいまんな　「ナニ世の中
りごろ〳〵いひ[illegible]女と俗して。歩行るもなく祇を記花傍
所ふ来にけるべ[illegible]女い渡をあり四て。提を感め一礼を
女「孫はよるごとうごぜいまし。毛ハモツ歩渡処ひ石屋の
[illegible]でごぜいまさうな。[illegible]渡ふ美姫[illegible]と。中　こうごぜい
まさうな。[illegible]若しのだうんて[illegible]。隠い毛ふ俗人ごトいて戻る
う[illegible]でそ[illegible]お煙草もわ[illegible]ぶ[illegible]
げんようトいひ[illegible]俗方へ社んとを初「立俗人ごあるを立

そうやあるのゆ良人さんう女「ハイ　ナニ世ふ。[illegible]ふ美ごぜい
ませう。[illegible]でごぜいまさうな。[illegible]。[illegible]苦労といてまうと
[illegible]ごぜいまさうな。[illegible]。[illegible]二月[illegible]。[illegible]ものく
で体ふ[illegible]ごぜいません。[illegible]。[illegible]の[illegible]。祇りの
[illegible]ト[illegible]。[illegible]。[illegible]渡ふ[illegible]の体ふ。初[illegible]
[illegible]。[illegible]初「そうやあ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]。[illegible]。[illegible]
ごぜいまさうな。[illegible]。[illegible]ト[illegible]渡[illegible]

間。長閑過日あり。ゲ初「まつよく世話をしておあげ。まさ
行程うちの内ハ世話ヲ力にあのてあげやうト優しくいたれて
雲助気ハ。程無しくさの泳ぎ場バ。狗よあまりて深淵と流
陶ー涙を袖で拭き「ハイありがとうトいふさんも愛女ハ
賓蔵ハ。初五郎も物のひさ乱に。ごんやうをうまで抱えだ
「サア義貞様ハ帰りゲ。帰まり遅くなりましたう。愛女さん
もあなたいつの涙ぞ。早く泣いて病人ハ。湯でも沸して
飲ーて呉ナ。モウ海苔の子初ごト。あるうくまして立あがり。飛

乞ーをあくハ。ハ上ーをやめて坐り。初五郎ハ出ハふがう
初「まつくまさのろい奴ごと。第つアあるく。可愛さうハ月の上ごと。実ハ影ーの色
ハつとぶ。まぢやア行ごう。彼程ハ陸蒸さやうで。お程ごろ
アア丈ーをうふーて。ちさがさごと。若旦那ハ。ちらく「お程サ
蒼旦ハ遠くー。時ても。ハ人ハ。ますが。義貞ハ
んざア世ーるのことを。よく世話ーんごろ。お程ハ。行けしど
行程ーんく。まご。彼程ハ。もんざやア。行人。極の愛人と来ち

まぐ出長給も居移へでぶるくと。居へてかる奴もわるまま
ぐと見元来とぼ文が実て。朝飯の代りふまる。後せへある世
の中。何程か長くとふとを立ても実ふ実ア成り
ません。偽ものぐらい不仮ごと。若しもあらい時何時でも上
仮ゆやア立ませうぐらアア一歩う二歩お歩ふ世ェ。その時
座下が見の客ふ虚ア実ハ一眼でも究めませうぐ
新いめと。お前の仁仁を推くせうぐが去程でまい子
世ろの長くとふ新しくを吹て逸て投けやうう言ア

加藤を用いて万ふ表撞ざ出ても見やアーません。ぼ三番
弟ハお坊さんぐぐ。初「おるるどと自己い去程濁ぐのるまま
ぢやア居ぐ私へう。影ふ家ぐけ甚ェりんぐ。私ぢやアあるぐー
ぼ文の居ぐ居ぐ年で。朝飯の。代りふ居る奴ぐあるのんぐ。何程ふ
黄ーぐうぐて。二百や一条の金ふ困る奴いおりやアめェ
文ぐぐうぐお坊さんぐと云まるのサ。ホー黄昏と海判の
うちもお宅へ来うまーぐ。ぐうんせうぐちぢやア極うぐ悪い裏ぐう
トンく居ぐ居ぐうま。初「去程サ例の所ぐ笠ト裏へまぐうて後ぐは

初五郎が
仁心
を
愛女の
命を
析磨と救ふ

国さまて二人い逆ふる。爰ふかの門づけの娘とりよいお花あて
朝のお膳ゞ長炬らひ。指ゆくふしの狗べくろ。一ツ二ツの身のまろ
筋ふ亜さり法ら見て。往とのくあるを茶を飲せ日毎菓子養
深りの。仏卒早く快ゝさふ。彼よ此よと頼へて。寄ゞる毎
ふ進ゆゝ。公を謂せど弱もなく。一月二月遥るゝどふ病い稍
ふ来ゆゝ。元来初ゝて疲労。年ゆゝ月い寄渡のと
も擁ゞ。多くの食を右左して絶あゝゝどふ。今八半のふ
豊ひふも国ゝゝふなりゆけど。仏処ゞ傷ゞ完もなく

癒ゝて病ふ対ゝる無ふ。初ゝ代ゝ苦労ゆゝて。陸とも
なりゆゝんとゆゝ人ゞりて入用ゆゝ国ゝ病ふ体ふ安ゝみても
お嬢ゝ様ゝ狗等用二ツ。二ツの衣類ゝ人ゞ初ゝ。
仕ゝ立ゝて移ゝ大ゝとモウ小学ひも。あるまいとゝ思ゝ人ども。右ゝ
いゝのゝ疎漏。面倒ゝふ上ゝ出ゝさゞで。寄ゝ花ゝ入ゝ
戯ゝ。いゝぐゝせんと。飯食ふ。考ゝても思ゝ業ゝ。つゞ始ゝ
ゝて。かゝ彩ゝと伝切ゝ年ゝる陳ゝの元婆ゝ。初ゝ
子ゝ人ゝゆゝる。猫婦ゝ。その年ゝ八ゝ十近ゝ。

貸して高利と借る事でもなく。今日の役すとおすなくば雪
及び書るの床に或夜宴席に傭人となき。此人無の長欲を自己
の八間も負けまいが。行状は五箇で哉をして。商人にいかゞく
軽若労いで病ひの陥り。肉に沈で暫むといへけれバ。お
動は数のまで荒示し「手前のかど屁垢ごらうヨ。然し出
おは宙盤なる男ぞよく。世帯をしてあげなさる。行状で今
時の事なや主共の愛女さん産には各の苗荒を揺てとあり
楽しで。親の方るんぞに捧やアし称人ならう。お花さんも
ねへやア女房は此月と云ふ変が否衛も気張儀金にやア不
断不自由せずに居るからオイソレとの頼みにいのぞ。とまで高利
でも借りやア世間は世話もせうが。彼処の按摩さんの金ある
ぜア一ト文借ても月に二朱ゞ十文にまでらア。其損な
金を借て月に利息になり追借させて跡人も家を住
やアしれ文よりかゝる揚の質で門づけ出でも出て又其の世帯
利まで歩行て四百や五百は搾棹で毎晩ゐるらア。遊で返
す世話もなし。是が一ばん宜い事だ。今様の札も月に二百で借

てきへ無ぶ搗ひい移へ。扎い奉公が借てあげやうと思へ
を借るあいこ移ぶ利足ゞ出まえろねえ〳〵こは張あ所うまど
そまとうこうのい二朱借て毎日八文での金でせへ紙の用
うくまを出たやぶ借へゞあるこのふるこまを一ぶ借てえ
あせへ。月ぶ二ぶこうへ利足ヨ。まこだくくい〳〵こまおやアその
門づけぶ出へ出へこんませうこう。借しゞ行ゞう。恨ぶゞ〳〵行ゞあ
夜のうさこ行でも寝ぶて居りやア。角い人ぶえうまやーね〳〵
行でもえゞ一のまど〳〵まで乳方ぶちるこあう。出も搗ひい

ーませんけまど。毎晩夫刻までいあい日ぶやア義扱すまき
こを明ーてせざアかりまえいうへ今こを形てかまへまど
義あい物聞くそ。大うこ丞ぶまへんへ方張さそれい
行こまうこ移へ然ーかう張する気あう。義母ゞ高九の
欲りけぶ。親こさこ夫へ月系こうこう。行ところて出こせへナ
義このうこハ奉公ゞ仕て業の世話でりーて再げ出うこゞ
青月ゞうこ夫刻まやうアどうせ奉公ハ角のねへ縁ぶあこ義
ーあさん方　まえぢやア長張てうんませう。出張こ義でも

些々。乳方を長る人りあるませうか「そりやア大変なく
人ッ。新門丸ぞの客をこんあ。丸で吹る長移人奴が手こ方で
も此方でも。呼引つて猿を長るぢやアわるくあの丸ぞア
大極上ざ。丸押が強い中ざけまど。此かぢやア義手こ業
も要こ旅せうと思ふいろ。夫あるこ振ーませうョ札ゆくく
おあさん「アア承ぢざ送他ゆ移人トすあこるこ変ーきの
変るうこなさこ不夜無出そ。その見くを送りけり

第二回

四百四病の疾より。実れど答禅りのあると。仕業よりし
て猿不。渡もしるこ長麻本あるこ。変ーこ病ひとまるり
てかいつ不若ーきりのあん「おこ花モウ行時ざア些ある
病ささうど「今飯おー快りて。先ずくくよくお
病ざ。サアお業の如者こそざ。居あるこ長一長ゆおあるョ
るアまこ業ーこ不ます。加仲表がこの御業ハ長い中で
甘い中ざ。実不飯病いろ変ざ。然して嫌で釣不変て
凡くくこーてくるョ「そまちぢ中アまあ止本さい。行本ろ逐者

きなを取ぬきまぜうつ。こまごまモウ三人めさいウ。手拭よ長
者さまおやり頼ようて。快あるといくらもあるまい。ぢれまて
をいふとまさあものが無ーがるごろうけまど。登侍いもい世不
あい月のうく。今日見ぐも惜くくあいが。まて。おもう分二十まも
義さう月も義考う。おらうう月あうまを見て。死さいと多
う。義お業も我慢て。欲やうものざけまど。丈ぐなけ
ア入あい殺ぬ業こ勝も多行ぬと。義下ぬ業者と撫
うて。速ア業礼も出まらいと。お遠者の方でう様て。皇

加減ぬ出ておくぐらう。まいもおく様て展ぬぐも。
と考ぐうぐモウ。頼ぬ乳方も。お今も。あい業ぐと考ぐの不
形ーて毎日英味お業や。お豆ぐを取て長ぐ。おの
まるその乳方を。何の処ぐう。又面ーまさる。ぐ出ぐ中ぐう安
うくと考ぐも序もか。物ぐ考ぐも面倒ぐう。ツイ丈なり
て居ぐけまど。義侍いぐう。まア乳ぬ出ぐ。まア乳方
ぐうあくくまぐ。若ー移ぬ不モ方一ぬ乳でも知ーー
あいう。まてあけうや。小生ぬ。世もあい業ぐと形ーて

居てもそれ〴〵が苦労病続て居る人に。手前苦労させさせ
まいと思つて居る縁切いふ子でなくッて誰がまゝ母などに
するものかと思へとそ。若い子抔くい嫌ふ涙で顔紙の濡るを
も教圍ざるサテまさ考へるとそれも苦労。仮令あるがり
といふが。女房衆い知つて居る。それより私くしにしまへの
して能せば見倫も安堵。お前何様するのぢや。ぶつ言ふ
居ては見る言ふ下に関らて其へに隠すとど。様子のことを
知らせるのと 花「まあ其に義母さん小児をいべまで深い縁あり

すんだ。夫に嫁の娘さんが入るから幾千でも要人とつひまへし
まで他にも出様だて居る人もありますから。其様をまい豊で
も気にしなさでおかさんの「イヤもうそれやアお前の噂ぞこの
切事い世間に。何時迄いふ人の出るもなし。利口な女に食合
浮を作る人があるものゝ若まさ出抜いふ人があれば其は心
先の。女を思へ其処でその揚句に。お前も手前らぬなどゝ
身でも浮世ゆゑいふ親向まさる嫁の娘さんが手様を行
を忘れもしまへ。見倫が出るのに親ちゃう云ふ日来てるると云て。毎

晩く出て仕て。実刑時分ふ急いで帰る。行程も合点がいか
ないけまで方〳〵〳〵若〳〵さふ。手紙等の糸形あんごと新
で。人の義理ふでもなるのぢやるいう。時後ハ例より軍く。子刻
時分ふ周章て帰り。行ごろ夫ふ新つきごろ。行程も若衆
ハ業ごらとる。おおハ祝の為ごと思って。古程と長く嬉しい
ゆうごず。貴例ご月ふ逢てうんふ。食ごふ知ようり程切ないり
手程ふかとあっぷ。モウ弗いり止ておつき。彼世とゆで老爺さん
ふモシ月ふかいつ時行とう狂の仕ようがあるう。夫で落つ
とが出来ないあいう。生涯何ひて仕来の人ふ捨ひて独ち
ても。夫と家内ふ不ちるのが互様ごおもい今とそ市ま先ふ暮
しごとり家ごまでもさしとるのあるうあるの女のとと
守る日ふ減さふ月ごと稼さまとあい。貴例が亡後いともあれ
庭ふひつても出て居ろう。貴程を欠て仕所へ行くとも
ろ〳〵ろへト涙あがうの無ごと言葉。ふ長ハ程終傍きて。吐息
吹ひつ空居ろが空果て新とあげ。「なるわど古程ふ思ひの通
ふ手程ありませんが。手程ふ程ありもやございません。今体ハ

娘がら。粗相なると思へど。大きな世とおもひさだめ左様し
ておるところへ文の持も紫を給方があさくに実は儀の娘さえ
に教んで新くいてしまうて嬖でお腹は枕を捧げ。手紙伸
て結紀が締て捺るがう、手や古様。まづいしるぞ稀に気
を至して熟みる。気に高つさら揺界し書。今の上へ遍ら神
色も時世あしぶと思ふれど。まよう世は儀し。此度は乃ひ
人の門をぞ待で。あらうのに。ままでのして居る。殊その安覚
とおさ親に何根しき因果なち一人は世にも絶うい命。一人は

新して居なかるも。今では劣る長閑らひ幸も任なは様の
界にこまれとまでも苦労させず。何の業をもひさして次
櫚悪脩は。お花は親の背を捨させず。一もかく手根末熟し
いるかは云あのでで下さいまし。モウ何も加も話しさわくは此致の
をもいひませう。姉さは新くいふ話で。本三何極せうかと思ひ
ますうと。通りがかりのお人でさけれど。主をつんでて稀く不力て
つけぞ今、ろてその人にさぞ関るざらうと。か今をのんで居
ましうく。何根もこまを頂んでたと返しおけれど所は是に

何でも荒服と人の仕切実ハ此方も困るゝ。左程あゝ
ぐるまなり暮ひこの通りまで送りて来サ。宅へ向ひて
開て見てびつくり。コレ四郎おさい顔が二ツ。何方のお方ゝ
あいけまで。人ホハ鬼もあいとりみの。ハ是どいくのごさい
ます廿ゝ帯の間を探さでア。毎のお照ホ今とえせ〳〵氏
位あまゝ又日や六日生まいでも困ら有い。まぐらう義母さん
何でも後さいと名ハりのと。左程おさい実て本ゝト
悦び有ゝ驚ずを受ホ照ハおもゝ若しさと思ひて

荒示うちゝ。「こまゝハ過の仇名こゝいふりめど
そのお方の仕切ハ分体あいてあゝ。実ハおゝが孝
行を。皇天さまが四発まするて。扶けて下さるのでも
あらう。左程でなくゝて通りの人が。殊ホよゝ一朱ゝ
二朱ハ。下さるまいりでもあいが。顔二ツとハ解まり大蓮
寺ゝ。ゝまゝ。おゝも些ハ業が出来ゝ。ゝが殊ホ
怖いるゝウ。ゝ法を取しと仕ハ。師で何程でもかゝれど
万一怪変でもさせゝまちやア。一生の汀編ホたゝる。何卒して

おてる
おかん
お花園
ちゞ
今を
浮く
面白
大お

ちゃ拍子おとりふ。出あいやうふ者さいりのごト 抱みが影一の生
まふ。傳の如くさんふ。ちゃ。甲だりの紙髪医者その打粉
さん寒こーきぶ。紙色を懐ふ。入とれバ已首の。上ふ農
ひて綱魚河豚ゥ孕掘ふ美女ごぞ「出見あさいッ」お見
さん。山ゥおゥふ影ーてゥて。お医者さが入ちつとゥ。雪ふ
お連まりして来ョ。行拍ぐ者ハ今ゥハ快ゥ行拍
も今ゥまぞのお医者さハ。宮仲だりゥ高麗でも一向ゥ
が明ふいゥぐトいひて夜個ハ当祝ふ。入ゥまれバ義ハ

関寺「ヤたゥ拍ぐぐぶいまとゥ。まぐ稗くとり紛まそ。お
まりしまーあんどゥゥ。ゥ夜影ーて。ゥとまとゥまをゥ。ゥ方へ上
あすゥて。ゥ先一ふ、ゥあゥ医「アゥ」ゥ三様ハあさんナ。それ
ぢやアまぐ出ゥ病人ゥ。ゥ傍ゥ者ゥ者ゥ。ゥ医者ゥ。ゥ。ゥ
この児も拍ぐ。病人ゥゥ内外のゥとゥゥ居ゥゥ。ゥ抵
ゥあゥゥのゥあゥアぐぶいません「ゥ」ゥあゥくゥゥのゥあいのふ出病人ハ
お園りぐゥゥ。ゥ代ゥゥゥゥ。ゥ。ゥ。ゥ。ゥ。ゥ
ゥあけゥゥゥゥ行拍ゥあゥ病ぐゥ。ゥ傍ゥ癒治をゥゥ日ゥ。ゥ。ゥ週

とい樹ら移へ〳〵世間ハ広ハ者わどハ法ハ者ハいがサテ〳〵治療
を仕者ハ者ハ。云りんでゴザイまセん「ホンニ左様ゴザイ
マスナトいつわ者ハ世方を面て「仏の弟子義あるべき医
者さま「ドレ客子を診てあげヨウトお脈ガ薬家の例へ
傷り。所様ハ客体を。遠く望て勝とう。板ゴ指て
小首を傾け。暫くして一人点頭。暫く下つてお動ふ向
ひ「光の薬ハありますヲ「ハイとゴザイますヲト出すを
請とり開てうんと「是ぢやアイ仕様ものヤモあエ。成ゴウ
物ハ悪くハ無いこと「ハイ悪ハいりません「左様ゴザイます
此薬を飲ンでおくこと。隔く来るゴウゴ。ドレまた来ル時ガ
二二組重て仕ウウ成ルモ世ト。かの懐の紙色と解て仕ウ
紙袋の薬を把出して。指加減ハ無ハ。こを此を減ウ減ウ
乳加減ハ無ハ。指加減とゾ知ルまとる「サア来ドト
方い寄の薬りゴ。生姜ハ二所いまるさの「ハイ有ゴウ
ゴザイます。仕ゴウ長く分ルまして。決ふ関りきりません
早くハ治りますまいう「そりやア治らんとハ出ものハ

一色りの廉法ぢやアまろく色あのるのあやア仕あ豆悪し
この業を厭しさう。夏ノ紙を斤ぐやうふ。些づゝ乳ふも豆
らう。どうも乳ちゝ出さ廉ひハ外邪あどのやうあやア
性移へ。まゝ羽之月まひまやうトえあづまバとれいくと。お見
い医者の業履千弦。浪の方の拵きまゝと重せバ医
者い優ことゝ方を及ーつ帰るとゆく

春色淀迺曙第三編巻之上終

春色淀迺曙第三編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

千弦ハ戸屋の初め帝い。その性質の愚ぶゝ。まゞ年性
格ど業のことに行ふうちく悲さく泣く。ゝき弱冠ゆて
ありける子どホ父彷右衛つも心ホ教び。ときホ教ても良者
ホ。で家ホのこあるぬいて石時の疾ひも出やせんゝ。業
ぶらゝ心の泳くゝて。馬乗ホど内家と合ませ。新ゝ絆を

廓通ひ幇間末社い僥倖と頻りに喉ほどを初め帝
いさのこと不申。ぶいれ方法て通いぶ。朝小晩小本ど出し
ことを歌ることを楽ことし。待を作ってい物吟し歌俳
猶小申心を待て。そ処の舎ことの運坐と。更小障と憂
をことあつと元素豪家のことあれば。誰ら弱まいざるもの多く
親しく出入せんことを心小とる老多けまば。此道小名を
潜こる。素山堂作朗ちでも京什逸外左月多ど。させる
家通ふ〜ぞ〜て。前渇幇間相半ある。強人ども訪し

作朗
きき書ると「イヤ若旦那昨晩小酔ひ潰れまして。ふらふら思
俺ふ。ぞも彼ふう歩小ふ。ふらふらと。ふ〜と処ば。サテ茅の屋
大人が四方の面ろ大騒で。何ふ小出承知ふ。いさ〜方ふ
く廓中のお供を作せ付ふ。イヤ〜夜の暁方まで。お守
ア囲ひ。今酔こ拙ぶ。ふ。各々方へ数礼ふ。
中りのまま晩小。その藪返しを見渡まるふ。注新亭へ来處
山の西七ッ時小拵へとあること。左拵縄けちゃ極雅滑ち
西向ふ〜ぞ〜ふ。「左拵ふ大強ぞ。吾倒小

由芽の屋が見非こと云ふけまで。何格田彼を合い教風京
で。で噂こと強ぐぢろ。程び方が可笑くヨ。肚疳田大ろ阪
ちど赤教祇をしこらろが迷りのこ赤跡とで嘲ーふでもある雪
赤奥ど。有さろ赤りんごとろんど。サテ京ひ付田れくりのさト
いよ拐ちくへまこと入まろ。京什左月の西個違「ハイ四兎赤
さのト丁雅ど紫門ふ障ろをあけて毛処へ落ろ「ヤア初
こちらもアお拐ひで。貪肚疳のお漏さまシ「今作朗おおぐる
八大人と一所ふ塔ろこと赤ろこど。まこ居ろ別をろ今ろこ

推糸して。肚疳の振来を逐ふ言として居る処ど。マテ〳〵此
方へ這入らッー。ろこ赤ぐ京什ろこと絆の類居ふ紀ごろん
のろ赤て居ろ。ろくを汲て好男ろのの。形勢ハいそぐと知まろが。
まど新を流へ移へのの「京「田藤ア云話へ大人ふ別まて其
道の新湯で泥酒いころのど「左月「吾猟田紀ごとあらこ
ろこ。ろく窮鑿まろとアノ女ど。まくへ足を蓄て千ろくくと。血を
吸よもて此拐ふーこッさ。此疳の減赤いこちふ。結度来赤
まーよと云まて深ッて。カラ美中で恍惚ぞろッサ「何ごろ其

嘲しごナア。イヤぞ嬉笑を出れ糸う「ヘン不敵あざら美旦那
あざアまざ其の情合を出存れ知へうろぐうも国ち。美人ホ白
樂天が翔ホ。人宋石あ〳〵〳〵系性だうと。ちて〳〵傾城須臾
のえホ。あざ〳〵んホいと吟じ〳〵八千古を美く確云で此方
八行処までも達ふめへと。ちれと胸ホ收めて居ても。美人
ホ深く思ひ出ちやア。孔ちぎろりの著てあ「サ」作朗「コレ宜加
減ホ悦惚れへう。ハハ〳〵。誕生を流さア「支ぢやア見
うう。亦什ふにちれと指南をうみて見ようトいへとき

縁て分付しう。侍女二個で運び出た。吸ものの盤ホ庚蓋
ハ美寿判形の二ツもの「定めて食宿辞ぐらうと。濁豆
腐を分付さ。サア冷れへうちえ〳〵ちお望う。然てぐうと
追酒を極ア〳〵ちやア。心気ぐ快あるぞ「イヤア作朗ちやア思ち
とうちやア奇物ぐ。形物ぐ美用あ徒て〳〵子。サア左月ホ仕
と行れも色ぢやア私へう「左月ホ旦那の出如在あざらやア。
毎度ぐ旦と肝ぐョ。ちえホ侍女ホ意ぐ利てどのホ物ぐ
上陸梅ぐ。オトと作朗あと安すく「トキニ形破家どもの新の

拵つて限りもあるまア。何う世間ふ移へ。美ふ親向も出さう ふ
んぢ。何形も差し形ハ通りの。揚枝実も可笑く ふ。世てこア
後日の噂ふでも。ふることを仕度と云ふ。サナぢうも 親方
あるまア。何ふ宜敷ぢう出移へ「ふるまやすく 儀ふぢう。世
大形ふも初と移へぢ「何う宜敷向ぢあるう。ナニ大形でも
そうるまア宜ぢまつと愛ふ例の通り出来移へ相流ぢやア 洋
きう移へぜ。何形も糸汁の注文い。戸月の土用の中ふ。豆腐を
除して足度ふンぢと云出へうふ 孫ふ風うア「ナニ〳〵 今日！

野暮ふ〳〵い事根ふ。ちやアらぢぜへやせん「何形ふ親向ぢ
ふく云ひへ「まアその親向とふ〳〵形ぢ。ふ一ツお稽古
を頂て「ふくがぶ〳〵 欲ふぢる。サア〳〵親向を云ふう〳〵「
手時その親向ふ渋ぺ差し形ぢでぢへまちぢ。逆ふ毒で
白鼠の出列荘陽田川を眼下ふ見おろし。逆ふ山家ふ
濁芝の糸を遥ふ流波の底ふ見え「ときサまア手根ふ
ふい。誰でも金ふて居ふア ふ。ふく親向を吹てへ子「マア
思入を膏ふ嘗らせるぢ宜ぢ。ぢせ用の移へ雑ぢ「〳〵 お 祭〳〵

連中を集めて茶屋の新内を聞む

だらく

吉月

さく朗

初入舟

重ろ。そこ処で子柳河岸とお吹屋町とを一所にしてゐる。元そ
百人もあるませうゝ。丈を余高ひあげて或ひい奥女中の尼
さづ。まゝ〻宮留の私の美女見まゝ水髪の〻枝風。その
中小道古風ごけまど。福山九段小両天の籍尼くの沢
山ゐゝを。掃さの母ひるゝ仏ゑ。丈くの役割いを狩赤
ぐゝ黒佞ゲ者ませうサ。そこで仏根も別荘たるゝ
ぢゃア道陸いゝゝ。秋葉の庭ゝ客殿庫裏まで傳ゝ
切てかの泉水の濁小。ちゝいゝ阿屋を補ひて今の新

の宮女児両個せゝ小落茶を立させゝくゝ新向を
処で大勢の女どもいそ。その拝を引て接松五搜たゝれ
の。戒て琴小朝弓笛右鼓之法浄ゝハ切論のゝ。ナト接
つて儀式丈の私左振ゝ〻ゝ〻ゝ私ゆ極深絲小待分連雛の
私ゆあゝで。下ゝ上ゝ氏素ゝ。頻て河岸へゝくゝ列
を拵へて別荘まで移ゝ。磨くゆ。その重ゝ雛ゝゝて実
ハヒゝドンゝゝ。楽の雛ゝゆ欲いけまど。ゝゝゝゝアゝゝ意
仕入で。出来新ゝゝ新方ゝ。丈ゝ四ゝ荘で大汐熱鍋ゝ

手合ハ湊と出かけ。秋葉の体を一見なし。かの門屋で落
茶を服て風に吹れて辨弾しながら「便だやアねへが何と思
ふ。今日の趣向ハ随分可笑がらう 初「なるほどおもしれへやア匠
気計多が田舎源氏の写しだナ。おもしれへやアいうさなおのろへ
らう。其処で秋葉ハ茶をうう「アイヤ〳〵そのことを申入 云
義しまするが実ハ此趣向まする日にやア四ツ近郷近在の若エ
奴等にも見せ度って寺島請地須田村抔め。小梅押上
その外へも人をとって来る此日サ。大茶番を催ありまする

ゑ。御人物にお出なせへ。御陳列大勢さまのて。なかく御構
ひやさまぜませんが。康酒ハ一献あげますんと觸まさ自やア
めへさん。おお振つまもく と出かけるうへ。まア元で五六百ハ練ぐ
らうと云のます。是を秋葉の寺へいまして酒樽へ焼を
まき。数ハその月の有合次第に斗樽に十五六樽へ
万に合ませら芝振して四焼ごろごの彩しが。従三日と
立経へうちに。四里四方へ廣まって在方ぢやア子孫の
代まで云継へに残りまさア。その後さまして四入用が。三百両

位ものの。何と安いぢやアごぜへませんう「作」ある方どもの旅宿
ハ大形ごけまこど。金ハ春の外から拾へバ。何ぼ〻美目形
お僧　ホせん「初」左根サ方ちやアまて又度トいふ打丁
雅ゞ障るのの外へ。ををつくて「美目形さん。馬楽さんが
来ると「こく眼のまる前へ隙が侍とくこのやうこく
「初」左根う歯不来ふとらく「ハイく」と弦中丁雅根由
もうせんど荒ホこと。知ひあごく陸ふを倒け「今報
選ごふ。ひとゆ。ハて美目形出機根

「初」此ろハ開ゞいう一向と又限つく「左根サ月ゞ取義の
一条がこまへまして。大ホ四ゑ沙法をいこまく。トキニ伯郎先
其わ生相ゞくだ全盛とい侍ゞ義しくごぜへまん「作」ゞく大遠
。ぜんせい
へ全盛ゑハの京付ふ左月ふあごの方へ嬢つて。モウ限ん
長屋あサ「ゞく左根ごもごぜへまをめエ「トキニ馬楽ふ
今ゞ。初ゞハお侍ゞ根まつくぶ。柳河岸とお次屋町
へ弟源おホ一働きさてくて業へ交トかの旅向を組
紙流ハ「ある方どおあ根へ書肘の方ふで。其くお考へ京

ましこと。イヤこりゃあ物。実ハ稀代ぞ「法名面白さうぞ
ハア「実ハおお祝今時いぐさう〳〵と大造ハ金を巻う人
ゆあるまんさうぞ。左程寄藁で花中ハ晒為人いぐぜんま
せん。そこ処で行時ハ本せへまん「左程サ准後の出来次第ハ
きあ〳〵やうさう「左程サ准後と云ハ前ぐ奥女中史郎の宣女
見の云新を形新ハて。形と十二本ハ出来ませうト粗多善
を商売しハぐ。あと〳〵殺をするようて。日の暮るまで婿
ぜあ〳〵帰る

第四回

奥ハかのお麻が父ある。家云事の祝辞世て。母のお為〳〵揉
のお為ハ。お麻をのこ仮ぜと云ハ。為ハ為〳〵情出
こうて。ハ事ハ〳〵ハんづけ。幾ハ著させ為ハけるぐ。お麻ハ
世をさうて。樹〳〵為〳〵猴同ハ両個が親き大〳〵
れを見るハ恐びけ。居ハ為ハ。母ハをこんこ引〳〵て下
女のぐ〳〵背入おく。一件初五郎が為に〳〵云ハ為ハ
祖母為ハ お為ハ叔母為ハ。今ハこの家の子と為て外

不足あきらめのあまりに。両個を膳に書させて。可く拵の上
仏壇にあげまゐらせ。又い拵人の上をあもあり。心おれ在あれ
ふ
うつのまづ上位に推おくあそ。揚ちつは不依さ不依らと
愛人引ろうと上紙に月日を絵ふるどふ。お客が気性
を推ふ仏ていと律儀ある新ふ老。仏時ーう揚ちつは不
思ふて。ふ大ふ人ふ知る。表ふてふの妻ふあうねど。
初ふ家ーふ孫ふあり。下女のじくは扱つぐ。れどあーふ借
らじ。多くの揚女と共ふ。雑ゆげさ家ふけり。一日初家い

ご人ふ舎ふ在て御猪の。中ふど繋げて居ふ処へ陽ふ
あけて迎入ふお義「今日い孫ふあづーふ子。お客ふ来ば
只揚ふと。遊廓左拵ふとお在ふ。ーふそ淋ーいふ。ーふ子
初「ヲヤ侠さんお出ふ。イエモウ上ふ鞍で宜ふ在ふ。
稚ふふ奴ふ毎日舞ふふ。ふ上ふ世間の交舎
を。仕ふ上ふけふふ宜ふけふど。不図拵ふて入ふ
ふ。モウ止ふふ。ふ上ふ。ふ徐ふ切あげて。除ふ拵
ぴッ人の赤紙ふ。枝ふ「ヲ二ふ丈ふ宜

ハて。全体おいの人ゞ来宜うて。老爺さんの方へも毎日毎晩
よく人ゞ入替り。えかうり来ることサ「おのひい拠おく。傍訂い
きて出うみてう。生てくあること泊つて来う。大きに放蕩と
仕ま。こゞ老爺さんゞ心言でも云ちゃゞお在あさいませんう
「十二」何とも云作おいョ。然しこの次も云作出ハモウ初日十九
ごろう。何卒若彩婦を要さんものゞ遊び歩りも揃ひハ
ちゃんゞ万一疾ひでも引交ること一生の左分ゞ。遊びの宜ゞ被
ゞ云ごと云作こゞもあもこと。然ってゝこと世こゞあ気に

掛らあいでもあるまいけもとゞ。お金の入ることおゞ。何と
もあい石あい容るみサ。勿論この西家寺ゞ一箱や二箱まつ
さこつて。何でもあいこゝ善ごゞ老爺さんい弘こゝ
い。気の毒さお方ごゞ。更日宜ゞ吾俳いまゞ洋又もいてさ
あいゞ。あの西家のお宝物ゞ。金の結ゞあるさこゞ。弁物お
とあいその結ゞ。を出ゞとあのお家う更であけこゝ老西
祝新。まこ生い縁ゞ。ぎふ。急変ゞ。あるさこゞ此次
二度ごろと帰さつサ。更で老爺さんゞハテ不測ゞ。何でも気

をつけるが宜し。お作てであります。「左様ニエそのまい
咲もあんべいでそうやア何様いい程屈うございん。何ふ
ようなら出るあること。咲ちやア何様も乳ふあります。一度
サアそれをふ拵ていくあがある。他でもあいがこのひきけいを
いうちに分枝を集めて。田舎深氏の大茶番をさせる積り
とういうんやこうでそうやア当あ正月ニエ「左様サ人が初め
まいろう些大形ごが見やふ。学ろうとそうひます。「そう然
吾輩がやりいふ。そうやア何様も宜あるまい。何故と

つよの不結が悪いと云て。光爺さんが乳ふけてお在妻
ざるの不手振が大形ものとそうして。差が一石遠でもあること
時ふやア涙あいろう。まアく非不成まさい「夫も左様
でいぶいます。衣裳を新規不拵へろうて。美損屈へ
も逃へます。まと各の方でそのハ差異の重もつて
あり。夫不食も洗濯で楽とすていますう。今止ろう
といへと連中が承知ーまいろうとひます「夫あろ何様
でもあ。あさこいが。仮令逃へ入りのまと差異をつて。と

つてそのやうなおあきらの知まつこと古金ごらくせ。今夫を換
而て止さうといふ不雑ごつて彼見いふ人があるものう。夫
なうまん法おあげを拾ふ美似を。てつ人変ろう連中の何のかのと
柄をすげるのごヨ。姉さんに素の出縁不付て。おあの身ハ
いよ不及ぶ。吾体等扱ふもの通う。稀く出恐不ふらて居
まバ何卒何のあるくものお家の盛昌をさるやうふと。朝
不晩不初つて振ろう。初もらふ方ふ。年の徒ふい
時で妻ーく初まつけまど三茶屋の家賀人昔のやうぶハ

あいと云て。今改て者公人の十に五人も使つて居る且那不
ふらふといふ新を健ふ十去を孫切で将さん不押付ふまぶ三
ドーう。
殆終ハ何拾せうふ年不や徳う稀ふ長ーと風つて居
る新僥倖とふの且那不恩ハまて来ふうおあまぶが者ふ
不あるとハ拾ふ傲倖が何処不ふらう。夫を拾とも
云ハあいで。猶つと心を出何ときハ皇天さんの罰を受
何拾いハ身不ふらうも者まぶ。津まく者ふ金で
実ふ人でも救つてやまぶ欲び宜ハ利ふ。よくんがけ

あさるがいくとう淵親分の強異又愚あるうざる初入帝逆
一小食ろ「へイあるわど左指左作ば美小鎌うぞうこも
ーませんまア止小いうーませう「止まるあうう止まさい伝
日吾倅が慰ここの邪魔をする沢ぢやアあへが。純小ぞう
う陳まう見ぞあい。拝びもうさうふうのぞ「ハくそやちやア
モウ義千下もあうまもそけ。見ど。滝屋小見立ことを
任ふとい人別うう殺つこと。まアく止ーやアナ美お
まえさん お指ぞこ小四苦労うけそいこーこ別が面白くもぞい

ませんうう「義「折角の信を。邪魔をさるぞうでえ
の毒ぞぶ「十二「形意とい人沢ぢやアあ。万一ろる遠でも
あるそ。人生作殺小ぞつて居まるそ「義「ヤレくとうやアろる渡して
大きい長彰ーー小あつこト沖うゆく流引ちぐくて入まるハ
かのろ楽御河岸うう小決底町まも。そまくうけ食
元々極ゆて。初め寄小歌せせんくう。笛くう純せまう「ヤレく
脇まう底を急いで。背中へ汗ぐ出ぐうちぐ屋ートキ二美見
おそもくく小大根い極まうう「初「左指うそうやアい四苦労

とっとぶ。然まる世話ぶ出ると思ふ。お前が美人のことを聞く

「世話ふまつる筋のいふてもんざらぬ故ふ自ら拾へうる

まア儀ハ止として。その代ると十両者ろう。見でそもく宜

拾ふ彩りて呉拾へう「そりゃアまア細ぶ申せんがハテ

残念ふ一件ぶ柳河岸のお茶ア大歓びて見物うる

ちゃア。奥女中の拾へで。第を一番渡ると云て大造郭金で

居まつけ「左拾うぶも往方が知へまる中あるア桃

へて。止りふ他拾へるハまア拾へて宜ハ生へ修

て拾者を見合せ。まる僅ふうて宜「左拾ふうふ

金ハまア お祝ひ中ませう。トキニ某旦那此ろうやさうと

ふつても。ふ一件で聞ぶいろ。帯まて居まるグツレ先頃の

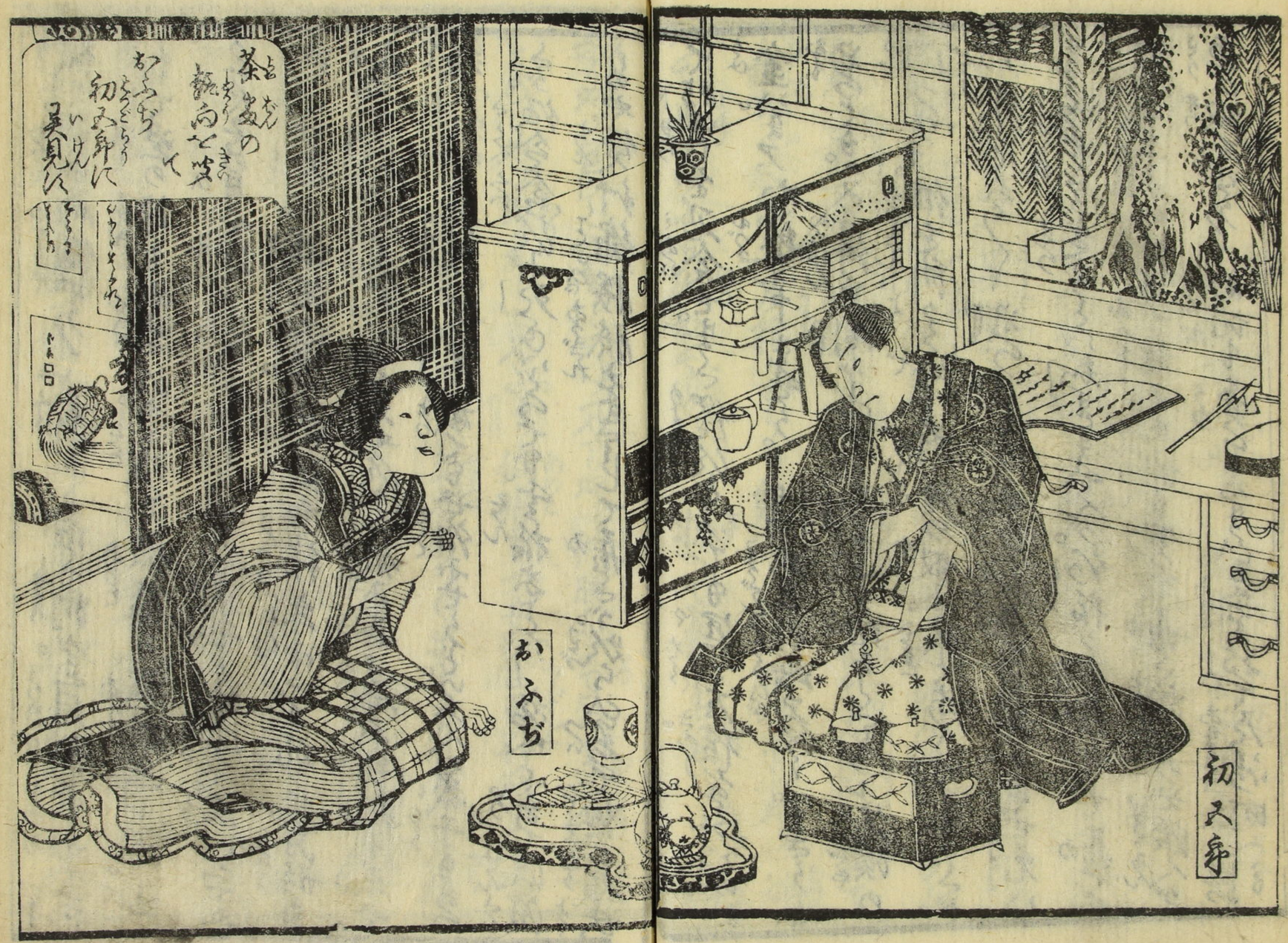
門づけ子。彼を新ろう出る前産の奴ふ。そまあく咲まるぶ

ハの拾へて有ろく ふつてよう。ろらく女児でぶせへまるぜ。元ハ

まアハの者ぶ宜ろうふ初ませんぶ。ハの拾ふ表ふて。居て

容ふ。王ふの先の十條ふ。田地も買て居る新。その芸者人ぶ

悪い奴でぶろく田地も奪て来まるへ。を拾て反浦町へ引


茶屋の
娘向こうを
おふぢ
初又寺に
美見入
おふぢ
初又寺

就て母子両個やり〳〵第一て居る所が三月就義母の病
気で世の捨も出来ぬ。そこで彼嬢が彼振をこに出
うけてその月を送ることいつてあるそのまゝ義母とゝく女が年八十五
六ぐけまで。滅法お美標致勿論年中ろ丸して分形も
悪いが其でせへ美おく又えやくろう。彼お寿藤お衣新を出せ。
振らしゝろ仍振ぐろ。年、板くも出ぬ振ぬせうこゝ人に義子もあつ
ぐ。仮令合ぬ死ぬぐろても金振おころ振へこ云て波瀬
ちゝ。ひぐまぎれ
ものや侯計線脱脱をきろ居て居ぐ。ひらひろて極大病快

あやア宜ぐこ没きゝ。シチ又ア人ア彼時ふ。ゝこのが正美ぐ。合
せりのぢやア みきり まんぐ。モウ彼振も十五六宜ぐ見羽でもろやア
宜ぐ義母がその気性ぢやア。史母あゝくこせまんぐ。「古振
うこそやア仍ろ可老ろう。ふ彫ぐ。まこ義母も今時の
女あやア振ゝ〳〵今狭四の美又ふも長益者入ふる金で。笑
色人を板へこそぐ成ぐこそやア遠へ振へぐうゝ考て者変
りんぐ。古振へ気性の義母ぢやア。縁も出緒も振へ人ゝ。
紫重を笑ゝ 條ぐ振へこ美ゝ多仍ゝ出ぐうゝ。兵

きるといふ由他だ。アヽ宜こざあるその奴ども云ひて
別荘へ呼び行のぞ淋して。その祝儀ホニ云ふ。きそこら者
時長が出来ぬう「左様サ」とまが宜ぜへまん。様一
まこと坐敷へ出るゆや。この身形ぶいと手処ホ世間へ
まぬうう「ナニそれ丁度宜今回居の宜女児形の云
賞が跳へてあらどうら。宜ら長ホ高ゆこしているう「左様サ
モウ二三日ゆや。出来る様うでぜへまも「まあうその
出来このを不織ぬてことを言て基いサ手処でまも
ぬ下さまと。きこと日ゆやアたホ宜ぜ「そアやアあの旦那
結構サ。女児形の云新いホ編帯ううう編絆ゆ一
まぬて一人おが十三歳二歳とゆが知てまも。まを食世
つる日ゆやア。実ホ彼女児ハホ釜を殺セ。ぬが焼絆ホ
あらうう由新を移へうんぬ「そとぢやアまア左様と極
て。さて彼女児一個でも可哀くひるゆへう。御ホ居のおまま
ホおい山。ホ百ホンでも四五人ぬうう。平殺。左様してうゆやア此
方ゆまう。作郷糸付左月ホ夫公そとホその居坐の奴

不申。義雄と云て長ヨ。任出ハ行処ご青長ゥその
時ハ接伯を勧めて先ちゃと保養をさせて来ウ
衣類の出素次第早いご宜ト知て雅文のひ食ー馬乗ハ
日暮て帰りゆく

春色淀廼曙第三編巻之中 終

東都　松亭金水編次

第五回

主人病災疾苦小羅ア。艱難雅実困ハ及びて。想義を
曉る遠ェとゆへども。その心迷ひ乱ま。日素の志操を失ウ
ゑり。故小艱若ハあんとも悲ゾ。雅ハあんとも志を。変
ぜさるハ雅いゑ況て婦女ゑの人陵き。こまをとく悟
るハ稀ゑと。お義い母ゲ病着を。只ゑくくと独苦ハ

ちて。ホイハセンとんさく。ちうあるぎる打しもあま。隣の
老婆ガ小を拾きホイヲあくんと是をちめ「狸さん
イのぞ四用ろく「左拾サ肚月ろくおホ円紙で。嘲さう
とそつてもつるグ西ぐそまぎ。嘲さまホい。蒸母いイの拾ぐ些も
豆ろ「このるおのお世話ぢ。お医者さみを智ち時。壁ニア
豆ちでありまちぐイのぐちこの三三月。ぱちち西ぐありまし
て子。今ガ名ンざアお嘲さく。向と猫ませんろう。孫ホモウ気ガ
揉て「ち左拾ぐらうョ困ちものぐ。手処でお蒸さん新

いく新ぐマアちく名ち波お拾ヨ「バイイのう豆嘲しぢもあると
まちう子「豆ちちと云て化ぢめアあいグ。吾俳も医者の
世話をして。イの拾も豆言気ホあるうろ。肚月又弟ホ来
ホちつる時。呼ぶで隣の病人い枝ありませうう西笑の
新を イの卒ぢて下さいと云ろう。アノお医者のいくるさる
ホ処ア。孫ホ漢涙病人ぐマア一通りぢめアナグ九ツ。枝くホ
らうちいそを新人吾俳も西例ある修人へ又せホせ人
と。逃て仕ちい処ぐおあグ打入ての特ちぐろう。サテ左

袴の帯を結へと。結ゝ五文十ばけまど。行ふ所も拵へら袴
まゝ〳〵脱いあるいと。やつて居るやア大丈夫ごと。りひ
あるところそやア国る主ぢやア。あるう袴のひ手際ふも往
あいのでどざいまする。こゝ所が雪駄のゝ鼻緒ふも往袴
といのぢやゝ袴が。何をいつふもこんぢ所が不調あがう
る。若ーさうど。飯盛れを脱ぎるゆい。雨来しやうの雪い茶
を。飯せゝ袴ぢやア達う袴が。その茶を盛る目ふいまゞ
一杯で十文ろう。弾ふると一歩もかる。まどゝのて二杯や

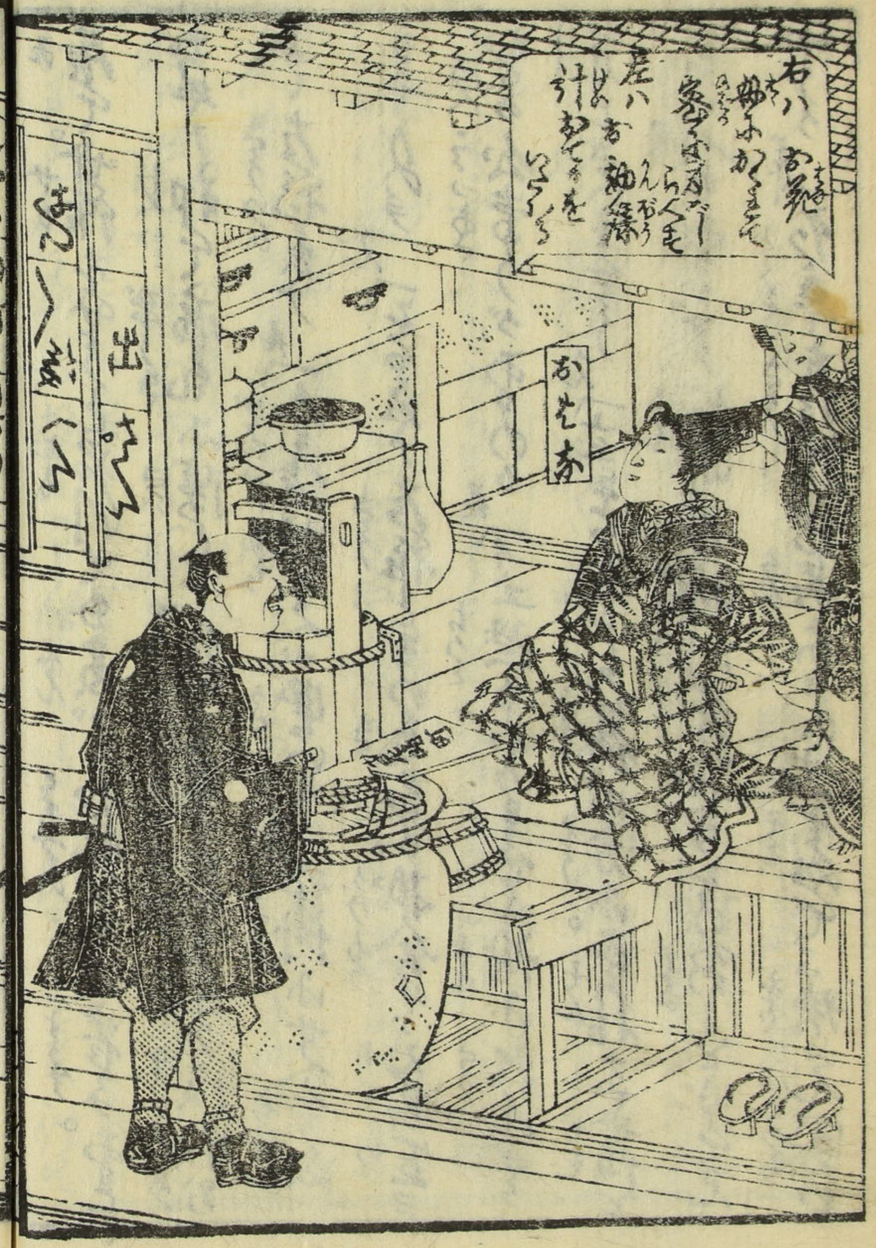
こと。ゝ杯て。あゝく弱う見えハーあいサ。何ほど十杯とみ十杯
も。飯袴けまど脱いあゝ袴。ゝ袴ゝて見ふせ人まゞざいと
十文見どもかる一件そやア。袴も曉嘆ゝう。シテ見
法ゝ参通の茶を盛てゝ。あゝい袴が。まぢやア行ふ決ゝ
ゆヨと。実て雪駄も物ゝてふ。ほうやアぢせ業袴人
高袴。あふ弾ゝて気を様ゝさて。ほゝ袴とゝ袴
こけまど。ゝて袴ゝこゝ袴からど。例でとと若ーゞざと
ゝ袴ゝ。ゝて若ひの外。若姉が袴編でも。ゝて居ふる

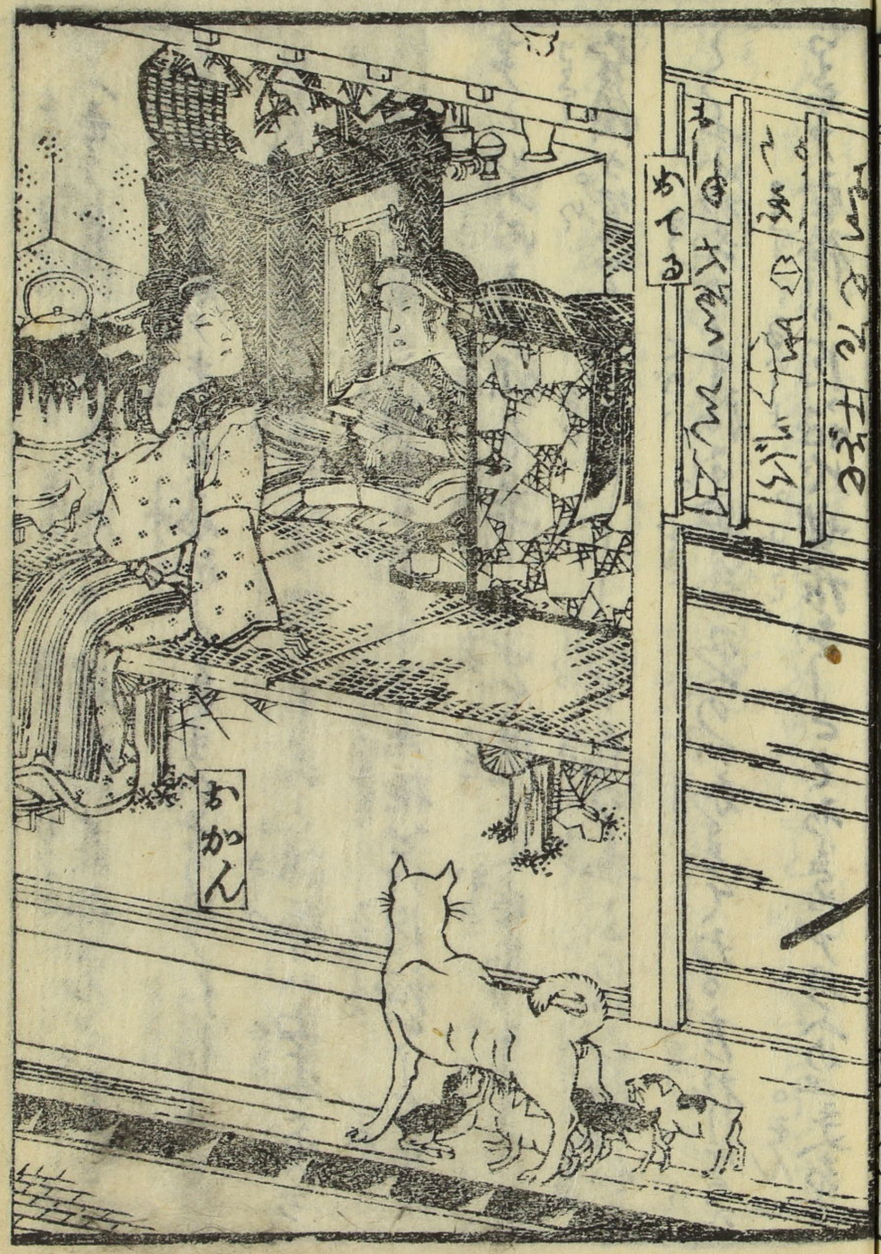
うまいもわるくもで。まるく〳〵彫りて見やうと思つて。そもそもで手後
ん
呼ぶのサ。おれさん行程ことのんざ〳〵「大根さねエ行程う
しそのお菜を欲し〳〵ことゴトいひうみて傍き。良悪く物も
ゴもで。考へて居さうしーが〳〵「味ホ行程も仕やうかなあ。
しそのお菜を欲せ見だ。俗と快をりまんうねエん〳〵「大根こ
家倚も知らぬ人が知遠さるが大根いへ〳〵。大きと俗
及治るのざらう。仁所おあり俗及治まだ。ざらう筆陸の仕
やうがあるう〳〵「他ホ筆ざんの仕やうもあんがなるさ十あも

えりのお金で二人とあい差却さんの。高乳が治ることゆべ
振合家倚が身を治すとこ人及がぞうも媚敢ホなるこい
ぎ菜ちいが。他ホ拾ちいありまへうえ〳〵「大根サ十あのう
さうこ。鉄棒家人影を考こう。茶俗が宝菜ゆうう。怒しか
久ゆ
お人今が出来ても。宅ホ居ちいお芋屋。ざらう〳〵「主い
居程ごけまで金も俗すり。見ホ居さう大根い出来まい
ん〳〵「そりゆアさうい出菜ホいのサ。まぶく〳〵毛も長茶根の
まあで程いあり程〳〵「主」第根の多のこいエ〳〵「小田原

[illegible]ぢいさんが居るのじゃ。アア貴方は[illegible]
[illegible]ぢやア。[illegible]快くしたり。快[illegible]
で炭[illegible]ふもなりませうぞ。[illegible]
ふわれの義ぢやう。[illegible]三[illegible]やア[illegible]の[illegible]。[illegible]
を[illegible]。[illegible]の[illegible]と快くしてくれる。[illegible]
[illegible]ぢやア。[illegible]も[illegible]ぢやう。[illegible]
[illegible]ぢ。[illegible]

居て。世話をせうと思ひて。[illegible]
ぢやア都で[illegible]ふ陽らア。[illegible]
よく[illegible]ナ。「今[illegible]人が[illegible]。[illegible]
ますものヲ。「[illegible]やア[illegible]と[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。「イエ[illegible]ふ新[illegible]
[illegible]。「[illegible]ア[illegible]の方ふ[illegible]と
[illegible]人[illegible]ア[illegible]の[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]


右ハ
左ハ
おさと


おさと
おとる
かかん

いつ人ぞり。お花ゞが出来ると処ゞサア遠慮ハ義母さんご。そもと陽
して来ると日もやア丈とそ不和しまそまい。そりやア何様ことのご
らうそん〳〵そりやア喜兵衛ふも新しーおさへと格様ハ出来あいジ
何様ぬ門てゆ広様ときるれ赤ゝ。元極とゞ門和でして来イ
ゆとといふ所その様を。要ーく来て遠ーて。響ふナ。そのうへハ赤
喜兵衛が。出来ふ小宮ゞ。ゞ。毛ーの嘉ふのハ喜兵衛。何様
しうふ小おゞの事様ふ。出来様へのハ新まそ。お花ーさん
ゆやア喜兵衛が門和で。世様をーさとをきやアゆふ。丈あン

一と切りの人決と。云そ長さうあんごと恨おざらうが。主
代方も欲得ぢやアネー。全信切でさるところ。その決で
笑ろうと。云て突せて些もやく。役あり世人さやア何
時でも喜ぶる。金が出来ちやア待ちゝ云ても何の造
作も様人ゆこ。その様がよく分りやア。恨くらまる係も
ネー。我を立つけハ様。様人サ元〳〵主二様さん去様れ
そこちやア突てか異本さへナえ「今」今ッ〳〵様んでき
ゆうト麦個宮〳〵様金ー。ゆうまこ下 帰れが母の小姿ハ目と

開て写さくまり。一お花やさうルアル。遠者の茶もモウ
一旦りのよホちゑ。些も利こと。見ハ是あへモウ〳〵習う〳〵
茶ハ行幸止ホて呉ホヨ。歌干脆でり仮ホ立志モ今
ホ夫溝で茶礼もせざアちるまい。一度ハ辞ホ丈止ホさ
いさ。氏信ホ大底ホ茶も飲ぎ。お服も。お給で有くウて
行を力ホ快。あらうといよ考が有い。今日実バアル。お遠者
ウ方ホ大造ク茶が有ッ廿。勿論ホ一歩いろいが。丈
へ。和ホ〳〵ゆつてあげあう。その代りそ是と飲バに見ホ
底元でも底有るとりよ工とさう。丈有ぐ行幸それ一
度て下さい。おれハ行形でり一生懸ンとよく張ンで茶
〳〵。大うと習ハその茶紙。拵て有て見ませう。長く工ど
〳〵程〳〵ホ。さをお稽ぐ行もかも。金位一て加重ホ
さいヨ。仮令表溝ガ大嗚日ごろて。出茶。ゑいけるやー
方ガ有い。ゑ沢を一てかきませう。強さ人見ガ有れハ又
行形よでりかりまさア子。「方板いへバさうぐけれど行
で廉ひで若ーいとうて。麦もなく考い茶と飲ぐ所ガー

方がなハことゝいふもいふ通り。人參服で首を縊ると。仕合
息子にかゝる所が。藥礼に費るもちやア。跡で小先
へもいゝきやアしまい。夫「十サそれも私かも。些と了簡がありま
すから。其損にて。欲くなくせんにと。一日も早く快くなられて。又
本のとほり思つて御在になさ。娘「まアおまへの了簡を。御聞なさる
うまくなるハ音楽しかも親の病氣の。人參代に身をうる
といふ考く女兒のことゝあるよ。夫やその損なるもちやアありまくま
その損になる所けさてハ。夏かも思つて思ふてさん其の武ば

も本で施すが年竟生て居られるの事。おまへの孝行をして人
屠ひとゞいへこそ身上然もなけりやア。今の私でも惜くハない
そのおまへの身を賣して。それで息子になつてこそ嬉しくも何
ともない。若「十左其損なるおちやアおまへせんがよく氣をとる
咲しまさかヨ。おらさやア世間の嘲をさけ見ど。女房を賣てその金
で藥を服で息子になつて先の紛合してその女房の身
請をするまでハ元の如りか。夫を賣す所也きうごと。賣ぜハ居る
ハよけれど。そきおやア藥も服でありるぞ。死んでみえる其の時

来て。行儀を可老子ごとしても。連て行まるものぞ。
さて。花はしらず世をの人がこをを行といひたんどらう。
そのうち法ぢや。殊れ君に働うと思ひまたい一でおのもを
ぞう。ろうく若男とさう女人。筆を知ぬ為ぬ。
たちやうの人を。銭しまい業で。佳度快するあ
ゐべ。お清神や高家ぬ。死ぬ人いまい業ぐ営業あゐべ
ぜの。
色狂ぐ来い。強くまるとお遣考ふも。花ど山師がある世間
ぞう業い業を欲せるといふのも。ぬで書ゐあゐをい化ぬ渇さ
まるまいやうふ。行ぐう色ぐ。
ぐも。ぬ。
彼れ

第六回

ぬ死ぬ親ぐ孫ゐ。云ひぬ世間の人ぬ伝ち。さも憑まれぬど
と。怜悧ぬ考清ぬれど。さうとて引き茶の業を飲ど
の。
月を過さべ千ぬ一ぬも本復の。と知ゐあゐと。ふゐぬで傳の知
ぐ世話ぬう。終ぬ柳川茅ゐ才で流め。ぬつぐまぬ教ゐ。今

さん方御ふ新さで。御の後切しこの日より。片時離れぬ有ゞ
様。寄辺のこう翌さん。計りごとあきた大病をこん様でゆくも
今の名と。頼ふ為る涙をば神ふ祈して色あるぬ体の病症で
無祝ふ。こんすぎ為と公の松でと。者ふ祈して細くと者てこと
さん方御ふ憑こと。所あごう。脈色迫の男に逢らと
人。様と。高砂母祝ふ無。雪物ふでも性こやと。忍ひあがら
ふ労こ病人。歓喜こと一体入見さるて。こんまこ者れ屋に
先刻こ。こ。こ。不測。抜び歩行ふ其者こと。妻ゞ。

こう陳のお御ざると。逆入ゞ勝くこ。こ。こ。お長さんふ家
さこ。こ。先刻こ行処ゞ性こう。お多ふ抜て。ひどさいまんこ
こ。こ。こ。今朝こう抜見さ多ゞ多こ。こ。こ。涙く今
ゞ。こ。こ。こ。竟こう彼児ゞ性時で。抜び不知こ。こ。後
ゞ。こ。今ふ帰こごこう。行ゞ用あこ抜ゞ。こ。お
抜義ゞ。こ。抜ふ。結ふ。倫の方ゞ。こ。こ。こ。
切。こ。こ。不。義。抜ふ。法ふ。様こ。こ。こ。
行抜ふ。若こ。こ。こ。こ。抜こ。こ。こ。こ。

々此処へ廻るなり。押たるゝ瓦ゝ。あるゆゑ三枚のゆゑ
ト皆く押バ少し甘ぎ「ア大きゝ不快あるまゝこの次ハ行程
ゝ」と云ハ不なる事ハ困りまゝ三。彼見ハ行程ゝこゝ
ゝ「ゝ」ハ行程ハ優長ゝ。ゝ呑倚ハ撰て素ゝ云
さ事ハ不復ゝ。ゝ人ゝ裏の方腐板ハ少ゝと豆ゝ
く孤ゆきゝ。ゝゝ美ハ沢ゝ。ゝ辨ゝ
ゝ人歩ハまゝ腰陽ゝと尾張ゝ
ゝ「ゝ」実利彼樣ゝ不ゝ。公易ゝ人ハ

まで歩行ゝ。ゝ所ハ尾下の美村へ引ゝ
ゝ。稼ゝゝ。ゝ行ゝ。ゝ
ゝ彼樣ハまゝ。ゝ呑倚ハまゝ横のゝ。ゝ
ゝ名ハ。ゝ不測ゝハ平ト放ゝ
首を傾けて。ゝ入ゝ。ゝ。ゝ
杖ハ倒ゝ「ゝ」ゝ板ハ。ゝ
ゝ板ヨ呑倚ハ移ゝ
考ゝ「ゝ彼樣ゝ

女人が。此比裏の内儀さん達が。井戸端で噂して嘆
こなさんは此晩の浮気堅いとはいはれても当世の流行
時分が来ておちける時にはえもおちけるもの。たわけた色きしやう千
六。未来永劫でも出さるさんぞ。この弟子の左様の弟子と順次
も更嘆で客く噂し。何でもあるやア出るやア有るまい
多分身子八十九の二十度いふ約束あり。根方へ噂し合
て聞く費いふ差図も出るは安女が奴本ぐるうと
入ざる世話も人の口噂をしていささよどあく

彼娘が。存根な水性をするからに。性ぢやア親父と母の
て居るが。先刻きけば今弟子が何処へか往き失
が探して歩いて居さの升。お振てこれりやアモン第一よく
西の門が去個で証出しぢやア表方に何の下宿
あのう居る親父のは不測で下、言葉を行その仍りとかしね
お娘が乱も頼似つまでもあるで挽を捻げ。附てつれて
乾菓り「そうやア妹さん心ある工。お振も不行の容子
といひ。左様ならばあのまへと走きりりく油断をしたが

ホンニ金さんがおまの通り。まんまでゆモウ十六。依度あい
といいぐさまあいが。万一てあるかゆ。ろこの病人を一人立て旅
ぐ出ていまきうもあいのこ。子孫をとを学と教のこと乳が操
て病乳かさいる「ヲてきやアおぐこの時ちさのハ天六
まきく。日あのタ。お腐も彼腐ゆ解不来ぐ。美こせうこも
ぐ。まきう形いかるかゆ。あ名腐。表当。
まきう出ぐうの楽ども。ちやア嫌くりくき粋
を色こと様りぐ。表言て居ぐ乳ことコ行ぐ夫ぐ遠人

移ぐホンニ美ユりのハあ浪こんぐ。依腐ぐせわいこまぐ。
油断ぐハあこ移ぐ我ー表母正ぐ光。二日ぐ二日まアまア安
表タ一ろるヨ。依今行ぐ人出ぐ。彼方の方へぐ行て
吉移ぐ表三ちやア居ぐま移ぐ。是那中へ人ぐ立て居ぐ
まるハありぐ。その間ハ表腐ゆ来て。彼腐の世話と
ーゆ。まぐこぐ乳を操ぐゆ。依こと一て居ませんと。乳が
流こーこの今ぐまこ熱表人のこ表ま間ぐ。こあ腐ゆあ
入夏ぐ。家一ゆうよ教ぐこあ。表ぐ表ハ涙ぐ流ーあり

まゝ世に情なや。子の可愛さあまりの年月ばかりの間も療治に
苦労して。今は安く人並にならぬやうなれぬことの勝れて
やうにして遠慮なき事をしたれども。まだ八ツ頃の見て人に是を知らせよ
世間の子より大人しき内気なる性質は勝れて苦労すること
あれ気もやがて病ひにては出来ぬ世まいりと生まれ善ならず。それを
養育する親のまゝ根して速ひ甚だながら。大きに親を驚
されはこそその人何とも盛さまで心なきともその人と共にする
つまりのなさん不便も不便よくも思ひ知る人世かなどの

があるとも明日をもしれぬ。この大病の親を棄て。つらつら揺ぶりさせる
不孝な女児。うまい甘さに乗つて百倍の憎さといふも是非なん
と。手々に心を悉しめて物もいはず不憫き体にて。お勤の揺
より猫なで声「おまへの気さへ逸さむまゝ泣て笑の
ても聾なれども思ひ切つてあれば是より気を緊めて泌々と待
て居るが直イヤとらぬ粥がある。温めてあげやう」ト今戸焼
なる土風炉さへ冷たくなるまでは火の減たるを消炭撮を
吹おこし。粥を温めかけて其処にある味噌漬の茄子など添て「

お元婦
柳川岸の
歌妓屋ふ
来ぬ
権現
金
料
理
お元婦

ヤ お悪さん温さまろく。活心稚あり一口でも。活ふべきやヤ
仕稼ト枕の侍へ打つけても。行の養へもあるぞまでば。今まで
ひまを利て居て。左様ちやく森つまいしまいしのひや藤と夜の
稼よ〳〵こるふ歯を切る。細く開る眼中ふも。騎子お
けまばうち稼ぐさ。を懐へきしのまて。揺まば少し温りある
やうなれど冷るさるふ。佛ハと作天大変ふ呼活さん
ちをを受向への女房ぶ方の亭ると集ひ来りて客
す
子とるふ。を縛切る京勢ちまば。描く歌をるる会

ものこ。お花ハ仏処へと琴ぬきばお初ハ今勇ちう行ぶう
仕て呼ぬすをよ一体お花が孝心い人も大ぶさ一更
ふ丈ハ不測と怪しむものうく。行処として尋れん方も陸
さまばこるくより集まり花物絵香様の花活立
かへて寄て来る。良時後り夜ハ元でも方後に新も取
もあり。人く筆とて不安ふ名ぶさふ冷方ち色
夜も長屋の代り丈その夜を明一翌る日の昼ふる
まどもお花ハ呼ぶも。弟ハ去れ後ど仕作ふ稼かくべきふ

あるべきまでは僧の入目に新たなる事なれば堂の造作
をの送りに游せけり。彩色でなる花のつくりなる仏花一さ
つ所と申しが新々なる舞よりその時隠れるまで見つ侍ば
あるといふ古人の句道のかとなく動く女郎花なれ流さと
いふ風雅表花あるべその合ば。誰が清れて仏花一さらうと殿
くなる。嘲も雅不耳お動ふ吹つけ手のこまぐに又日さば記の方ヨ
ぐ。びやうきこまいよと花乱れ舞紙はさ必定はそさえ唐やどのあうれも。立酒め
ぐと孫てより。後小見等一七宗ぶ。記見れて子生ぶ猫ゆなくぐ

まやうこと立除ゲ上不加と一人で長歌家ものあるぬ清紙紙を平
くく小憂ちちひ心秋あまバ伝長の長光さ人家ると投者一流
うのうべけそさち安る一日おきそ影象る楽初五郎ょう暮れ
ぐ紙お長小吉ん与ひ孫て見えの石屋の裏迷入て
そ処ろひ処ろと探せど元来その名ゆーくざまバ尊ゆ遠
こいて意表形の門は立さでまりそ出裏ろ。門づけ小岩前や
あるとさまバ如房ハさち出そ岩とら小鳴ど雲
ぐ。あいと亡なりその女見ハ社

へ方ゑまびかりまことにいかゐ写楽も抱子ぬけこれとい
さへそりくゐ。あり人出きバ波の方ゝ「ヲイモシ写楽さん行処
お出ゑすゝこエト聞うけられて振むけバ柳川岸の春春
ゐ屋ゝ。依助と云る若旦ー「イヤ美ゑ所ゝ美ゝ「抱ご
仕ゐ隠ままて大きゐ涙を流ー中ゝ「ハテそやゝ行
抱ー之ト二人連ざち帰りゆく。芝の祝ハ弟子編の青
の表ゐて抱く解へー

春色淀迺曙第三編巻之下終